

夢と絆～北朝鮮での24年間、そして今～

まきずな

第15号

2018年10月

＜発行＞
泉南市人権啓発
推進協議会

8月19日（日）、文化

ホールにおいて、「非核平和の集い」が開催されました。今年、拉致被害者である蓮池薫さんをお招きし、お話ししていただきました。開場は午後1時30分

にもかかわらず、当日正午前にはホール玄関入り口に列が並び始め、あつという間に長蛇の列となり、想像していたとはいえ、市民の皆さまの関心の高さに驚きました。

蓮池さんからは、拉致された状況、北朝鮮での生活について、具体的に、そして丁寧にお話ししてください、ただただ恐ろしさとして真剣に考えていか

なければならぬ出来事であると改めて痛感しました。



＜参加者の声＞

＊僕にもわかるお話でした。生まれて9年。24年とは、長かったと思います。（9才）

＊ニュースで見っていたら遠い情報だと思っていたのですが、お会いしてお話しているのを聞いたら身近な問題だと思ひ恐さを感じたのと同時に、蓮池さんは強いなと思いました。（40代）

＊実体験に勝るお話はないと思います。いろいろなことを率直に語っていた

だき、胸に深く刻み込まれました。微力ではありますが、この問題が解決できるように、何かができると思っています。（60代）

＊核には核しか通じない世界になってしまったことを悲しむことしかできない理不尽さに、怒りさえ憶えます。ただ祈るのみです。今なお他の被害者を救うべく尽力されている蓮池氏には敬服いたします。お元気に無理なく取組を継続していただければ幸いです。（70代）



平和のシンボル アオギリ 農業公園「花咲きファーム」に 移植しました

ム」はバラが咲く季節にはたくさんの方でにぎわいます。より多くの市民の皆さまにこのアオギリを知っていただき、いつまでも平和を大切にする心がより広がっていくことを願っています。

平成28年7月20日

に、「平和を大切にする心を後世へ」と願い、あいびあ泉南に植樹した「被爆樹木2世アオギリ」。泉南市の平和のシンボルとして、市民に生きる勇気と希望を与えるとともに、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を訴えかけ続けてきました。

この度、このアオギリがすくすくと成長し大きくなってきたため、より広い土地で市民の皆さまに愛されることを願い、農業公園「花咲きファーム」の芝生広場に移植しました。農業公園「花咲きファーム」



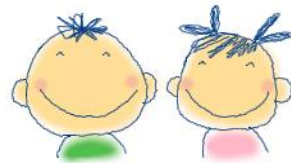
2017/9/1



2018/8/27

地域の子どもは
地域で育てる

「牧野のあそび場」夏休みに開催！



スイカを前に、目隠しをして棒を振り落とす。「やった〜！」の歓声。7月31日、牧野老人集会場で「牧野のあそび場」が開かれた一コマです。

「地域で子どもと高齢者が集える場（居場所）の提供」「地域で子どもや高齢者を見守る人材の育成」を目的として、昨年の夏休み（7月26日・8月2日）に「街かどデイハウスきぼうの輪」で開始しました。最初は参加人数が少なかったのですが、冬休み（12月27日）に牧野区民センター、春休み（3月29日）に信達小学校で開催するに連れ、参加人数も多くなってきました。



今回も、NPO法人きぼうの輪、泉南市地域包括支援センター六尾の郷、NPO法人泉南市認知症ケア研究会、信達校区人権啓発推進協議会、泉南市人権推進課、泉南市長寿社会推進課など関係団体が協力し、75名の参加がありました。

当日のプログラムは、午後1時30分に始まり、全体の体操、ボランティアグループ「拍子木」による紙芝居、その後、グループに分かれ、囲碁、将棋、オセロ、タブレット、泉南カルタ、昔遊び（こま・けん玉・輪投げ）、風船バレー、ア



みんなで考える 子ども食堂講座を終えて…

「さまざまな地域で『子ども食堂』が開かれている」と、テレビや新聞でも話題になっていましたが、単に食事提供だけなのか、現場を知らない私は、今回の講座に非常に関心を持ちました。高槻市・西成区・泉佐野市の食堂に関してお話を聞きましたが、それぞれの成り立ちや、子どもたちの現状、関わるおとなの状況など、全く違うものでした。ただどの『子ども食堂』でも共通して言えるのは、子どもの気持ちによりそうことを大切にしているということです。

子どもたちが置かれている社会は、周りのおとなに守られているようで、実は見えない紐で縛られているような…おとなが想像するより、はるかに生きづらいものがあると感じることがあります。そんな時、温かくておいしい食事を食べながら、誰に気を遣うこともなく、ほっと落ち着ける場所があれば…と、自分自身が子どもの気持ちになってみて思えます。そんな場所はおとなにとっても落ち着けるはずですよ。泉南でもそんな場所を増やしたいですね。（講座受講者より）

トバールンなどいろいろな遊びを体験しました。午後2時40分頃からすいか割り。地域の方から寄贈された八個のスイカ。すいか割りが初めての経験の子どもや、童心に返る高齢者の方。みんな嬉しいうな、そして楽しそうな顔、顔、顔…

最後に、みんなで一つのテーブルを囲み、たくさん、たくさんスイカを食べました。地域の交流の場である「牧野のあそび場」を今後も関係機関・団体が話し合い、どのような形にしろ、「場」づくりを引き続き行えるようにしていきたいと思っています。

（信達校区 中尾進）





つながり vol.5

このコーナーでは、日ごろ何気ない生活の中で、人権が感じられたり、ふっと暖かな気持ちになるエピソードを紹介します。

朝のぬくもり

「おはようございます」「気を付けて」

一日が始まります。登校日には、近くの横断歩道で、毎朝7時から8時まで約1時間登校指導をしています。多くの人と出会います。

大人の方は、通勤時間帯と重なるので、車や、單車、自転車、徒歩などさまざまですが、車の方は、手を上げたり、会釈をして通過されます。自転車や徒歩の方は、「ご苦労さん」と声をかけてくださいます。一部の方ですが、状況を見て、横断歩道手前の停止線で車をとめて下さいます。その時は「ありがとうございます。嬉しさをかみしめながら、どのようなご家庭なのだろう？きつと温かい和やかな日々を過ごされているに違いないと想像しています。」

子ども達の様子を見てもお家での楽しい様子も思いうかべることがあります。髪が長い女の子のヘアスタイルが日によって変わっていくことに気づきました。本人の希望なのか、お母さんの指導なのか分りませんが、三つ編みの日もあれば、ポニーテールのように束ねている日もあります。子ども一人ではできませんから、お母さんとの会話があつたはず

です。お母さんが子どものヘアスタイルを整えながらどんな会話があつたのか、思いを巡らすと、楽しい気持ちになります。また、休業日の次の日は各自、大きな袋を持って登校しております。袋の中はおそらく体育の学習に必要な衣類など入っているのだろうと思います。洗濯物を自分で整えて袋に入れたり、お家の人に整理し入れてもらったたりいろいろでしょう。登校する時のグループ

も少しずつ変化していきます。4月当初は兄弟姉妹一緒であつても、次第に離れていきます。これも成長の一端でしょうか。友だち



台風21号が気づかせてくれたもの...

9月4日に上陸した台風21号は、私たちの想像以上に、大きな影響を及ぼしました。数日間停電や断水した家庭もあり、普段当たり前に見える洗濯機や冷蔵庫、クーラーが使えない、夜は真っ暗な中ろうそくや懐中電灯の明かりに、家族みんなが集まるといった状況でした。

ここ数年『人権のまちづくり』をテーマとした講座に参加し、阪神淡路大震災や東日本大震災を経験した講師より、「平日頃から地域のつながりが大切だ」という教訓を何度と聞かせていただいていた。しかし、いざ今回のような災害が起きた時に、これまでの教訓が活かされたでしょうか…。私自身わかっていたようで、甘かった部分があったと反省しています。

ただ、「地域の中で暮らしているんだ」と感じるがありました。朝、がれきを片付けながら、普段はあいさつ程度のお付き合いの方と被害状況を話したこと、夜中に電気がついた瞬間、外に出て拍手で喜び合ったことなど…。普段慌ただしく過ごす中で、希薄になりがちなご近所づきあいでしたが、あらためて、家族や地域のつながりを考える機会になりました。私は一人で生きているのではないということを…。(y.n)

関係も変わっていきます。登校中の会話の内容は分かりませんが一生懸命情報交換していることは確かです。とても楽しそうです。このように考えてみると子どもにとって生活そのものが学習だと思えます。

毎日子どもの様子を見てみると大きなぬくもりを感じます。子どもとの出会いは私の健康の基(もと)となつていようです。3月を迎え、卒業式が近づいた朝、6年生の子どもが「6年間で難うございまして」と告げに来てくれました。このときは、「ぬくもり」と同時に「あつさ」を覚えました。

(砂川校区 清水真治)

憲法週間&男女共同参画週間 「市民の集い」

さる6月3日(日)文化ホールにおいて、2018 憲法週間&男女共同参画週間「市民の集い」として、映画『キセキの葉書』の上映を行いました。



「キセキの葉書」を鑑賞して

阪神大震災の半年後、被災地・西宮市を舞台に、難病の娘と認知症・うつ病を併発する母親に挟まれた女性の実話に基づく感動の物語で、24時間介護が必要な娘のため帰郷できない主人公が、母親の気持ちが少ないながらも明るくなるようにと毎日送り続けたユーモアを交えた葉書は、13年間で5000枚に及びます。主演はTVのバラエティ番組などでおなじみの鈴木紗理奈さんで、

度重なる試練を乗り越え、勇敢に生き抜いた主人公を熱演し、この作品で2017年マドリッド国際映画祭の最優秀外国映画・主演女優賞を受賞したのも記憶に新しいところです。集い当日は午後1時の開場前から続々と来場いただき、最終的には文化ホールの定員500人を超え、一部の方は1階ホールにモニターを設置し長椅子で鑑賞いただくほどの盛況でした。

映画上映の後、原作者の脇谷みどりさんとお話していただく予定でしたがあいにく急用でお越しいただけず、集いに参加いただいた方にメッセージをいただきました。うつ病から「死にたい」と泣いてばかりいる母親を助けるために毎日電話をすれば電話代だけで何万円もかかってしまう・・・、葉書だと月1500円で済むと気づき即断した、という脇谷さんですが「イラストと、くすつと笑えるネタを交えた葉書を送る。」「毎日11時に実家に届くその葉書を待っていてほしい。」「そして次の葉書が届くまで生き抜いてほしい。」と想いを込めた葉書、ネタ探しのため長男が学校や通学電車で見聞きした話を膨らませるのに苦労しますが、結果として家族の会話が增え、西宮から遠く離れた九州・大分に住む母と子・孫のきずなが深まった、離れていることは何ら障害にはならないと言いつつ切ります。

幸せかどうかは他人が決めるのではない、他人からどう見えようと、自分がこのままでいいんや、このまま幸せになるんや」と信じて生き抜くことの大切さを改めて考える機会となりました。

(西信達校区 柿本繁雄)

編集後記

台風21号は、思わぬ爪痕を残し、置手紙して荒々しく去っていきました。「災害はよそ事ではないのです。」と。困難に直面した時にこそ、絆はさらに太く、強くあらねばと実感しました。さて、『きずな』新聞は2011年8月の創刊以来、今回で15号を数えることとなりました。これまでにいただきました多くの皆様方のご協力に、深く感謝しております。

今後とも人権への思いが詰まった温かい紙面になるよう努めてまいります。どうか、ご意見ご感想をお寄せください。(企画委員会 編集委員)

募集中!

『きずなポスト』を設置しました。

人権に関するご意見、日頃思っていること、何気ないエピソード、または行事や映画会、講演会などの感想、『きずな』新聞の記事提供やそれに関する感想など、どんな些細なことでも結構です。どうかご意見をお寄せください。

よろしくお祈いします。

※なお投稿については、氏名・住所・連絡先を記入の上、市民交流センターにあります『きずなポスト』に直接投函していただくか、郵送していただいてもかまいません。

